



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ランカシャー綿業の産業構造(三)
Author(s)	琴野, 孝
Citation	北海道大學 經濟學研究, 6, 105-135
Issue Date	1954
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31008
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P105-135.pdf



ランカシャー綿業の産業構造 (三)

琴 野 孝

一、はしがき

二、ランカシャー綿業の起點

三、ランカシャー綿業の確立（以上三・四號）

四、ランカシャー綿業の展開（一部四號）

五、産業革命への展望（以下本號）

六、結 語

(二) 農村織布工

然らば、前項に示された如き間屋制重層化の趨勢は、農村の廣汎な地域に擴散する織布工たちの上に如何なる形の變化として現われてきであらうか。この點に關する檢證は、織布工の營みを明示するような具体的資料に恵れないため、彼らの經營面からの確に裏付けることは困難である。然し概略の傾向は大凡推斷されうるのであるから、次に農村工業地帯に眼を轉じて織布工の營みを検討してみよう。

第 2 表 Occupations of Parents of Children Baptised

Parish Register of	Upholland			Walton le Dale		Penwortham	Denton	Middleton		Radcliffe		Oldham			
	1700-3.	1720-23.	1730-33.	1704-8.	1724-28.	1725-8.	1723-26.	1730-34.	1746-50.	1742-48.	1776-82.	1725-27.	1745-47.	1765-67.	1779-81.
Agriculture :															
Yeoman	15	10	4	8	1	17	3	8	12	5	—	39	8	15	8
Husbandman	3	7	4	13	15	63	5	39	45	33	34	—	11	3	2
Farmer	8	28	18	—	—	5	—	12	17	—	4	3	—	—	2
Unskilled :															
Labourer	65	35	18	2	3	27	4	2	2	—	—	59	11	12	24
“Poor”	—	1	—	23	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Industry : Textiles :															
Weaver	35	72	41	72	34	37	31	219	434	132	295	278	320	375	561
Whitster	—	4	4	12	8	—	3	1	2	33	42	—	1	1	—
Fuller	—	—	—	—	—	—	—	2	10	4	3	—	—	—	—
Dyer	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—
Printer	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	—	—	—	—
Clothier	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	19	10	37	26
Chapman	—	—	—	—	—	—	—	7	6	—	—	4	3	4	3
Linman	—	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Fustianman	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

Tradesman	—	—	—	—	3	—	—	—	—	3	5	1	—	—	—
Reedmaker	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—
Twister	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12	8	18
Throwster	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	8	—
Flaxdresser	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
Cotton	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Manufacturer	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Clothdresser	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—
Woolstapler	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
Scribler	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Engineer	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Other :															
Collier	—	8	16	—	—	—	7	—	—	29	35	31	44	56	86
Nailer	5	14	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Hatter	—	—	—	—	—	—	6	—	—	6	11	1	6	31	74
Banksman	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	6	9
Other Occupations	46	69	65	37	21	39	16	66	72	68	72	100	107	121	167
Single Women	3	3	14	3	6	6	8	25	31	12	31	24	48	66	56
Unstated	12	6	25	—	20	9	5	2	1	9	2	8	34	148	118
Total	193	259	224	170	115	204	85	384	634	334	546	571	640	902	1156

この時代のランカシャーは、産業經濟の發展に呼應する着實な人口増加が認められるのであるが、併もその増加は、マンチェスターとリヴァプールの急増を考慮に入れても、人口の都市集中を招くよりは寧ろ農村の人口増加或いは増加人口の擴散という傾向を明白に示している。また、それと併行して荒蕪地のエンクロージャも引續き進行したのであるが、その結果は小保有地が創出されて工業人口を吸収していつたのである。かくて農村工業の擴大と發展が顯著であつた。先の第二表⁽¹⁾は農村工業地帯の若干の教區に關する人口構成を示すものとして掲げられたのであるが、この表から纖維工業に従事する人口の比率が極めて高いこと、資本家的な「雇主」^{エンプロイヤー}の存在が大抵の教區に認められず、寧ろ小生産者層の占める比重の優越していることが看取されよう。就中織布工の數は壓倒的に多い。彼ら農村の織布工が概ね織布經營と小土地保有を兼ねた半農半工の生産者であつたことは一般に認められるところであるが、然しその中にも農閑期の副業として織布を營む husbandman や農工經營を適切に結合する farmer-weaver などと異なり、恐らく收穫期の數週間を除いては殆んど農耕に携わらない專業織布工の階層が劃然と形成されてきたのであつて、それは例えば、組合結社の辨明に發表された “Linen and Cotton Broad-Ware Weavers' Apology” (一七五八年)⁽²⁾ が專業織布工の工賃低下の要因を farmer-weaver の競争に基くと主張していることから窺われる。尤も、十八世紀前半の段階においては未だ、土地を全く保有しないか、或いはせいぜい小屋住程度の、專業織布工が支配的な階層であつたとは斷定し得ない。それにしても、專業織布工の増加は一應小生産者層分解の一歸結として考えられるのである。すなわち、分解の進行に伴ない土地所有という經濟的基盤を失つた貧民が増大した際に、quarter sessions は彼らを小屋住として荒蕪地に吸収することを認め、エンクロージャや農場の細分を通じて小綜劃地が創設され、master manufacturer また購入した土地を小區劃に分割して織布工に賃貸したため、かかる土地制度に擁護されて農村工業地帯の人口は育成されたのである。然し、それら織布工も今や農耕に充分な土地を保有しないのであるから徐

々に兼營農業を放擲せざるを得ず、專業織布工の増加を招くのであるが、これは益々高度化する織布技術の發達に應じうる專業織布工の陶冶ともなり、綿業の發展に好都合な條件を築いて行つた。それ故この分解は極めて建設的な成果を齎しつつあつたと言えよう。ともあれ一方にかかる專業織布工が出現してくるが、然し何と言つても織布工の農工兼營は依然通常の存在形態たるを失わず、農村工業地帯には普く彼らの小農場がちらなり、住宅や織布小屋付小保有地の賣買乃至賃貸借が頻繁に行われ、一般に地代も可成り高額となつてきていた。⁽³⁾ところで、元來この地方の土地保有規模は平均して狭少であつた上に、新に創出される織布工向の區劃は更に小規模なものであつたから、小屋住農は言うに及ばず、通常の五—十五エーカー程度と思われる小保有地で彼らが本格的な農業經營を行うことには餘り期待がおけなかつた。従つて工業の發展につれて織布の需要が擴大すると、當然經營の重心は稼ぎの多い機業へ移行するのであり、農耕は漸次粗放、散漫となつて兼營における農業の占める重要性は次第に後退してくるのであつた。すなわち、これら農村工業地帯においては農牧に改良農法がとり入れられることもなく放置され、織布工は屢々數頭の牝牛を飼育するにしても、それは自家用のミルクやバターのほか若干の餘剩が残つて地代支拂の一端となし得ればよい程度であるし、土地の一部を主食用の燕麥、祝祭の折に用いる小麥、或いは馬鈴薯の耕作に充てるにしても、通常完全な自給をなし得るまで大がかりに耕されることもなかつた。結局兼營農業の役割は「家族に勤勞の掛け口を與えてくれ、食料不足の年には役立つた」が、それは仕事のとだえた時や不作に備えるための「單に便法としてまた手代り仕事として」のみ行われたのであつて、「眞に生計の資に代るものとはならなかつた」という程度の消極的な意義をもつて過ぎない。⁽⁴⁾尤も、土地の使用目的はただに農牧業のみに限らず、工業目的にも使用されて機屋周邊に張物枠^{テンメー}をおくことや運搬用の小馬を飼育する上にも便宜を與えていた。然し總じて農村織布工の農牧經營は前世紀に比べると甚だしく後退しており、農耕乃至土地使用は彼らの經營上にせいぜい補助的な意義しか認められなくなつてきたのであつた。

さて、然らばかかる farmer weaver はどの程度の経済的獨立性を持續していたのであろうか。この點は容易に速斷し得ないのであるが、彼らが相當規模の土地所有者である場合は、兼營農牧業も右に述べたよりは更に積極的な重要性を帯びたであろうから、それが獨立經營の據點となり得たし、更に土地所有を足がかりとして自らが「雇主」となつて小資本家の機能を兼ねて行くことも容易であつたものと思われる。然し時代の進むにつれて土地所有關係にも漸進的な分解が進行したとみられ、當面の farmer weaver に關する限り強靱な經濟的基礎を保持するような富農層よりは寧ろ小土地保有農が次第に支配的要素となりつつあつたものと考えられる。もしそうであつたとすれば、兼營農業の役割には前述の如き消極的な意義しか認められないのであるから、小規模の土地保有乃至農牧兼營の有無が直ちに織布工の獨立性如何を示す指標とはなり得ない。寧ろ逆に「依然として土地に執着しながらそれから充分な生計を得られない」彼らの存在こそ、まさに資本をマニファクチュアの集中的生産よりも、農村の豊富な cheap labour を驅使しうる前貸制の擴大に投下せしめるための素地を準備していたとも言ひ得る。恰も十八世紀初頭以降海外市場の擴張につれて織物需要が急増すると、生産組織の擴大はおよそ前項にみた如き前貸問屋制支配体系の擴張として現われてくるのであり、その前貸規模においても支配体系の頂點に立つ merchant manufacturer からみれば、織機數百臺、雇傭人員數千人に及ぶ巨大資本家さえ出現する。勿論かかる巨大資本の前貸体系を肉づけするには農村に散在する多數の「中間的織元層」の介在が必須であるから、徒らに龐大な雇傭規模が直ちに直接的な生産支配を意味するものではない。われわれは寧ろそこに介在する中間的小資本家群のより、實質的な「生産過程の支配」に注目したいのであるが、それにしても十八世紀中葉に至る頃までにランカシャーの工業は一應このような支配網に覆いつくされ、織布工は概ね何らかの形で前貸資本に從屬するに至り、當然その活動據點であつた週市も往年の殷賑さを失ひ、急速に退潮したのであつた。言うまでもなく、そのような從屬的狀態に陥つた生産者の存在は既に前世紀よりも相當廣

況に認められ、殊に名譽革命前後よりは急速に増加しつつあつた。例えば一六九六年の *Recoinage Act* に續いて生起した貨幣恐慌の時期に、マンチエスターの問屋制商人は通貨不足に禍いされて多數の生産者を就業せしめることができず、そのために困窮している彼らの被傭者は控えめに算えても四萬を超えると述べているし、一七〇〇年に深刻な不況が訪れ、貧民労働者の窮迫、失業者の増大、貧救税の膨脹などと悪條件の重なつた時期に、ランカシャーの “most considerable Traders in Fustian and Linen manufactures” は前貸原料の横領・竊取を嚴重に取締る法律の制定を請願している⁽⁸⁾。尤もこの問題は問屋側の工資支拂が現物給與でなされた弊害とも絡みあつていたので、二年後にインランド西部の織布工の現物給與制反對運動を契機として制定された “An Act against Truck”⁽⁹⁾ においては現物給與と原料私消の双方を禁じているのであるが、これには先のランカシャーの請願が反映されて、麻織物、ファステイアン織などの織物の製造業もその適用を受けることになつてゐる⁽¹⁰⁾。従つて既に十八世紀初頭には、問屋制資本に全く從屬的な生産者が大量に存在し、併も彼らに對する前貸支配はそれに伴う原料私消の弊害を法律によつて取締るを要するまでに進展してゐたものと思われる。

このような趨勢の下において生産要具の所有權までも失ひ、全く獨立性の殘片をすら止めないデ・ファクトの賃労働者の増加して行つたことも想像にかたくない。殊に紡績工程は主として農村婦女子の副業か、或いは下層貧民の生業として選ばれ、従つて紡績工は工資も頗る低く、「膏血労働を提供する無秩序な大衆」として全く *labouring poor* の相貌を呈したのであるが、就中輸入糸との競争の脅威に曝されてゐた麻糸紡績工の状態は極めて劣悪であつた⁽¹¹⁾。王政復古後夙に紡績工程では救貧目的の *spinning school* が計畫されていたが、これは後日の大規模マニユファクチュア乃至工場制度に連なる集中作業場への構想が既に計畫者の腦裡に描かれていたことを示している⁽¹²⁾。然し、かかる資本家に從屬的な労働者が増加したに拘らず、西部工業地帯にみられる如き労働者の結社は十八世紀の中葉に至る

までこの地方では認められない。恐らくこれは、生産者の主軸を形成する織布工の大部分が幾莫かの土地を保有する農工兼営者であり、家族労働力を駆使することによつて賃銀の低廉を補いうる家内生産者であつたので、かかる點からたとえ次第に獨立性を喪失してゆく傾向にあつたに拘らず、未だ労働者としての利害や意識に關心を懷くことが妨げられ、更に農村に分散していたことが一層彼らの團結を困難にしていたものと考えられよう。

なお最後に附言しておくが、このような農村織布工の大衆がマンチェスター大資本の前貸体系の支配下に從屬してゆくことは、必ずしも彼らの中から繰出されるフレッシユな農村小資本家の絶えまなき上昇運動を閉ざしてしまふものではなかつた。その問屋制度は極めて弾力性に富み、マンチェスター商人の支配も決して一方的に苛酷な重壓とはならなかつた。従つて農民的土地所有を楨杅として浮び上つた農村の小資本が、巨大な前貸体系の前に分解して行つた生産者を自ら生産組織のうちに再編してゆくことも可能であつたし、自らの所有地を分割してそれら織布工の定着をはかることも現實に行われた。併もこれら小前貸資本家が地域的な自己の前貸支配圈を保持しつつマンチェスター商人に從屬し、巨大な前貸体系の一端を分擔することも、或いは全く獨自に經營を續けてゆくことも、ともに資力と能力によつてのみ自由に決せられた。また、假令土地保有規模が漸減し、兼營農業の重要性が後退したために、農民的土地所有を楨杅とする身分的上昇がより困難となつたにしても、「實踐的個人主義」と「流動的・彈力的」性格に富み、「上下に階層づけられた秩序」から解放されていた産業社會の内部には、未だかかる上昇への足がかりには事缺かない。殊に廣汎な農村地帯に前貸網が擴大されてゆくにつれ各地に大前貸資本家の putter-out が必要となつた譯であるから、才能と精力ある織布工にはとりたてて資力の蓄積がなくとも、これを踏臺として資本家へ上昇する緒は容易につかみ得た。その上、merchant manufacturer の生産支配は次第に生産過程の直接的支配によつて利潤源泉を拓かんと志向してきたとは言え、農村工業に對する生産支配は自ら一定の限界にぶつからざるを得ない。従つて織布工

から浮び上つた農村の中間的賃貸資本家にも、また都市の間屋制大資本に従属する putter-out agent にも活躍の分野は未だ大幅に残されていたのである。われわれは次の時代に工場主として立現われる人々の多くが farmer weaver の出自であつたことを知るのであつて、例えば、ピール父子⁽¹⁵⁾、ウィリアム・ラドクリフ⁽¹⁶⁾、ヂエディダイア・ストラット⁽¹⁸⁾、J. and N. Philips and Company のフィリップス家⁽¹⁹⁾及びジョシユア・フィールダン⁽²⁰⁾などとその例は枚舉にいとまがない。

註 (1) Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 314-5. より作製。

(2) Ibid., pp. 316-7, 346 f.

なお農工分離の傾向は十八世紀後半を通じて更に顯著となるがその必然性については差當り、Chapman, op. cit., pp. 9-10. 及び Lipson, op. cit., vol. II, p. 68 を参照されたい。

(3) Ibid., pp. 317-8, 337 f.; Daniels, op. cit., p. 136.

(4) Aikin, op. cit., pp. 23, 224 f., 472; Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 319-20.

(5) Dobb, op. cit., pp. 230-1.

(6) 一七五一年の“Committee on Chequer'd and Strip'd Linen”における証言によれば、マンチエスターのロバート・リアジイはブラックベーン地區で織機六百臺を、すなわち一人の織布工に紡績工四人を要するのであるから實に三十人以上を「雇傭」していると主張した。このような例はフラスティアン織やチェック織に限らず、ウォリントン⁽¹⁷⁾の帆布、ロッチデールの毛織物、マックスフィールドの生糸然糸にもみられる。(Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 140, 211, 262 f., 274, 280-2; Bains, op. cit., pp. 131-2; Daniels, op. cit., p. 23).

(7) Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 238, 252; Moffit, op. cit., p. 220.

(8) Wadsworth & Mann, op. cit., p. 89.

(9) 1 Anne, c. 18.

(10) Daniels, op. cit., pp. 36-7; W. J. Ashley, The Economic Organisation of England, 1914, p. 145; Bland, Brown & Tawney, op. cit., pp. 545-6.

原料私有に関しては、Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 89, 276, 393, 395 f. を参照。

- (11) Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 90-1; Chapman, op. cit., pp. 58-9; Adam Smith, Wealth of Nation, Book IV, ch. viii.
- (12) Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 91, 406.
- (13) 先述の“Linen and Cotton Broad-Ware Weavers' Apology”においても「祖先の遺してくれた僅少の土地で生活し、……この（織布）業を修得した人々」——part-time agriculturists——が低賃銀で就業するので、「その業にのみ頼っている」（われわれ）専業織布工の工賃も彼らの水準にまで引下げられてゆくと訴え、半農半工の織布工が賃銀交渉の際のウィーク・ポイントであると主張している。（Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 317, 320.）
- (14) Ibid., pp. 276-7.
- (15) Ibid., pp. 172, 280, 322.
- (16) Mantoux, op. cit., p. 379 f.
- (17) William Radcliffe, Origin of the new System of Manufacture, commonly called “Power Loom Weaving” 1840. pp. 9 f.
- (18) J. Felkin, History of the Machine-wrought Hosiery and Lace Manufacture, 1867, pp. 89-97.
- (19) Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 288 f.
- (20) Mantoux, op. cit., p. 380.

五、産業革命への展望

新興工業としての活力と「産業の自由」の社会経済的基盤に恵まれたランカシャー綿業は、前世紀末以降の着實な発展より飛躍して、十八世紀の三・四十年代に至ると加速度的な成長と変貌を開始する。生産器具の発明と改良、生産過程における分業の促進、織物品種の増加と改良、織物生産の著増、市場（殊に海外市場）の擴張、交通・輸送機關の開発、資本蓄積の進行、労働人口の膨脹等々が渾然一体となつて展開し、連鎖的に発展への衝撃を加えるが、それに對應して生産組織においても、また商業・金融機構の面でも産業革命への途が準備されて行つたのであつた。

先づ綿業発展の一指標として、その急展開に強力な刺激を與えていた海外市場の開拓について概観しよう。取敢え

す次頁の第三表を掲げたのであるが、これによると戦争や市況の偶發的變調で織物品種別の輸出量に地域的な伸縮が認められるに拘らず、全般的には綿製品輸出の著しい伸張が示されているのであつて、とりわけ五十年代以降の飛躍は目覺ましい。殊に重要な市場はアメリカ大陸及び西印度諸島植民地で、主として粗布類を輸出するが、植民地經營をめぐる西歐諸國間の角逐が英國に有利な展開を遂げ、海上霸權もまた確保されてゆくという間に、これが着實な伸びを示したであらうことは容易に首肯されよう。更に奴隸貿易の起點となるアフリカ大陸への輸出も印度木綿とせりあひながら、アメリカ獨立戰役中の例外を除いては屢々著しい跳躍を示している。ところで、印度産のキャラコやモスリオンとは國內市場においても競合するが、その競争からうける影響は單に内外市場の爭奪問題のみでなく、また技術的進歩に與えた貢獻という點からも無視されないものがある。すなわち國內工業に對する印度木綿の脅威は物議をかもし、一應一七〇一年と一七二一年の法律によつて除去された。その後においては單にこの種の織物に關する國內市場が確保されたばかりでなく、印度木綿模倣品の生産が促進され、織物品種の改良や捺染技術の發達に好ましい結果をもたらしている。殊にファステイアンはキャラコ代用品として廣く需要され、國內市場においては著しく進出してきたので、これの脅威を排除せんとして毛織物業者の妨害運動が起り、捺染ファステイアンの使用は一七二一年の法律に抵觸すると主張されるに至つた。尤も、これは三六年のマンチェスター條例によつて改めて違法でなき旨闡明されたのであるが、當時既に印度製品との識別が困難なまでに品質の向上を遂げていたと言われる。植民地市場の需要は益々薄手で強靱な木綿、麻織の類へと向いつゝあつたが、就中チェックはかゝる要件をみたす大衆的な輸出用織物であり、殊にアフリカ市場で印度木綿と競合していたために最も品質改善の刺戟を強くうけ、捺染も頻りに行われていた。従つて十八世紀前半にはこの部門が最も活況を呈していたのであつた。然し十八世紀後半に入るとファステイアン織がこれに代位し、またベルベット類も新種織物として登場したが、後者は言はゞ高級織物の市場たるヨーロッパ大陸に夥

第 3 表 Exports of Cootton Piece Goods

Year.	Material	Ireland (£)	Europe (£)	America, W. Indies, etc. (£)	Africa (£)	Total (£)
1699	Fustian	101	396	5,737	6,621	13,138
1709	"	661	170	3,229	1,122	5,182
1719	"	2,028	341	5,070	414	7,853
1729	"	930	229	6,007	2,439	9,605
1739	Fustian Checks. Printed	2,481 — —	520 — 100	5,455 1,387 —	42 4,339 —	8,498 5,276 100
1750	Fustian Checks,	1,928 —	362 —	7,626 1,904	8 7,839	9,924 9,743
1759	Fustian Checks. Printed	11,870 665 160	184 — 216	13,075 40,850 3,209	4 39,090 35	25,133 80,605 3,620
1769	Fustian Checks. Printed	24,933 3,682 9,604	2,143 51 5,781	4,829 40,597 21,287	18 97,972 709	31,923 142,302 37,381

1779	Fustian Checks. Printed Manchester Cottons	5,308 — 13,840 19,148	1,588 — 8,524 217,638 207,526	7,854 15,670 22,867 57,991 11,600	7,825 158 — 7,983	14,750 23,495 45,388 219,126 302,760
------	--	--------------------------------	---	---	----------------------------	--

しく侵透して、イギリス綿業世界制覇の前觸れとなつた。かゝる綿業の發達は第一表に示した原棉消費量の趨勢にも的確に反映されているが、この時期においては棉花供給源としての西印度諸島がレヴァントを凌いで重要性を増してきているのであり、この點からもイギリスは他の西歐諸國に比して良質の棉花を廉價、豊富に獲得する便に恵まれていたのであつた。⁽⁴⁾

一方、生産技術の面でも後の技術革命の先驅となる發展が次第に進められ、資本制生産への拍車は益々加わつてゆく。就中、smallware 部門においては十七世紀末にオランダ織機がロンドンより移入され、それ以來比較的高價なこの織機の master weaver のもとへの集中は決定的となり、マニユファクチュアを形成する傾向を明確にする。なおまた、中には漂白、仕上の工程をも含めて全工程を一貫する大規模マニユファクチュアや水力を動力とする先驅的な工場經營が出現したことも稀でなかつた。⁽⁵⁾ ファステイアン部門においても十八世紀初頭から整經機が使用され始めるが、織布工が不斷に使用するわけでもないこの機械を狭い仕事場に設備することは稀であり、また流行とともに變動する多様な織物品種に應じた經糸を準備するという事情からもこれは主として問屋の設けるところとなり、整經機使用を契機としても前貸支配は擴がつて行つたのであつた。⁽⁶⁾ 更に一七三八年に特許をとつたルイス・ボールの紡績機は、尤もサミュエル・タチトの手腕を以てしても工場經營が失敗に終らざるを得なかつたのであるが、それには roller

spinning の重要な原理が具現され、紡績工場の前驅をなしているし、織布工程においても一七三三年のジョン・ケイの飛杼は三〇インチ以上の廣幅織物の織布にも助手を不要とし、これらの普及に伴ない紡・織生産力の乖離は更に甚しくなり、紡糸の不足は深刻となる。⁽⁹⁾これが紡績機發明への衝撃となつていたことは言うに及ばないが、織糸不足の結果はまた merchant manufacturer の紡績工程に關する生産支配を擴大せしめたり、問屋の織布工に對する綿糸前貸が棉花に置換えられて、紡績工程についての責任を後者に轉嫁させる結果をも惹起し、總じて織糸不足の隘路打開策は資本の生産者に對する支配強化に導いてゐる。⁽⁵⁾drop-box の發明は杼の色糸を使いわけることを可能にし、drawboy loom の出現は模様織の種目を多様にしたのであるが、このように織機が複雑になり高價になることは織機を所有し得ない織布工の増加を招き、賃機制度の擴大となる。新種織物の生産は細糸や特殊織糸を必要とし、これらの專業地域が出現したり、綿糸を経糸に用いるために撚糸機の使用も始まるが、ベルベット織糸の紡績には夙に粗紡と精紡の工程が分化してきた。このような技術上の進歩は漂白の化學的操作や捺染・染色・艶出などの仕上工程においても尠くなかつた。かゝる客觀情勢の裡より Society for the Encouragement of Arts, Manufactures, and Commerce が「同時に六本の糸を紡ぐことのできる機械」に賞金をかけたのであつた。⁽¹⁰⁾

さて、このような發展段階に現われた著名な merchant manufacturer として、その餘りにも多彩な活動は些か當時のマンチェスター資本家の例外に屬するのであるが、こゝでサミュエル・タチトの業績に注目してみても無駄ではあるまい。⁽¹¹⁾

タチト家はウォリントンの出である。初代トマス(一六七八・九—一七四四)は pinmaker であつたが、十八世紀初頭マンチェスターに移り、麻及び綿織物の問屋制商人となり、織物の取引も兼ね、殊に ticks と fustian の西印度貿易によつて著しく繁榮した。彼は遺産として親族への年金のほかに、息子たちには二萬磅をのこしてゐる。長子サミュエル

は定石通り家業を分擔するためにロンドンの事務所に派遣されていたが、外國貿易の魅力が彼を惹きつけたものと思われ、忽ちレヴァントや西印度の棉花及びヨーロッパ大陸の麻糸輸入に活躍する大商人として重きをなしていた。特に棉花に關しては一七四六年に輸入總額の十八%以上、四七年には約二十一%を買占しているのであつて、當時の棉價高騰はタチトの獨占的買占と市場操作に基くとまで騒がれた。また彼のアフリカ奴隸貿易への進出も華々しく、アフリカ會社の有力なメンバーとしてチェックや麻織物を極めて大量（年額五千乃至一萬磅）に輸出しているが、マンチエスター商人にしてかゝる奴隸貿易への直接的介入は寧ろ異例のことでもあつた。このような貿易業に關連して西印度諸島との間の手形取引も手ひろく營んだが、ロンドンにおいても彼は一流の金融資本家であり、公債の大口引うけや多額の貨幣貸付にも觸手を伸ばして多角的な經營を續けている。かゝる彼の活躍はマンチエスターの商人として過去にその比を認められないが、その上彼の冒險商人的投機事業には正に典型的な“profiteering Empire-builder”の姿が示されているのであつて、イギリス十八世紀の政商としても興味が深い。例えば先の棉花市場獨占と價格つりあげを策したと言われる一七四六年の場合も拿捕船二隻の棉花を一萬五千磅で買占めている如く、彼の貿易事業においては戰利品への投機が業務の一部をなしていた。續いて、一七四九年にはラブラドル貿易の排他的獨占を企圖し、これが失敗して後も一七五六年に戦端が開かれると、アフリカにおけるフランスの商業根據地たるセネガル攻略をはかつて軍資金と武装船舶を提供し、奴隸・象牙・金・蠟の寶庫でしかも織物捺染に不可欠なゴムの主要供給源たるセネガル貿易を掌握せんと試みている。かゝる積極的な商業・金融上の活動は彼をしてロンドンにおけるマンチエスター商人の指導者たらしめ、議會や政府筋に對するランカシャーの産業的利害の代辯者となつていた。殊に一七五一年の麻糸に對する免稅やチェックに關する輸出獎勵金獲得の運動は彼の煽動に基くとみられる程で、政治的手腕にも頗る恵まれていたのであるが、後には議員にも選出されている。然し彼の活躍はこれにとゞまらない。ロンドンにおける

大貿易商人たるタチトは、同時にマンチエスターにおいてもチェック織の大規模な問屋制商人であつた。それ故生産過程の歸趨にも深い關心を懷き、ボールから紡績機使用權を得ていたエドワード・ケイヴがノオザンブタンの紡績工場經營に失敗するや、これを引繼いでその經營を試みている。併もその時期が恰も彼の棉花買占と符合することは、或いは極めて雄大な獨占的事業の構想がタチトの腦裡を去來していたかとも想像せしめるのである。だがかくも精力的に多岐な經營を續けたに拘らず、一七六三年には三十萬磅餘の莫大な債務を背負つて破産し、彼の經濟活動には終止符が打たれた。餘りにも發展的なその事業慾が自らを迷路に陥れたのであるから彼の破滅も蓋し止むを得なかつたが、その巨大な構想の中には來るべき時代の動向を示唆する何ものかが散見されるし、その潑刺たる事業歴にはこの時代のマンチエスター商人の生氣が生々と反映されている。

さて、タチトの例が當時の綿業界において例外的なものであつたとすれば、通常のマンチエスター資本はどのような營みをなしていたのであろうか。この點先ず基本的には前世紀以來顯著な變化が認められない。すなわち十八世紀末においても、「大商人は殆んど例外なくマニユファクチュアラーであつた」とラドクリフが述べている如く、一應その經營には原料商乃至織物商としての商業的機能と「生産の組織者」たる問屋としての産業的機能とが絶えず密着していたと言えよう。たゞ仕上工程の技術的進歩に伴ないこの工程は益々分化して複雑多様になり、かつ固定設備にも多額の資本投入を要した。のみならず、この工程は市場の嗜好に最も迅速な對應を必要としたため、織物商としての問屋の、仕上工程に對する支配は次第に強化され、直接の下請仕上工を雇傭したり、或いは自らが有利な捺染・艶出工程の直營に進出してゆく傾向も顯著であつた。⁽¹⁹⁾ また一方海外市場の急激な擴大はこれらマンチエスター商人に對しても輸出貿易の分野で有利な活動舞臺を開いて行つた。そのため彼らの經營の重心は原料の輸送や生産者の監督に煩瑣な手數のかゝる前貸支配よりも、ゆたかな利潤の期待される商業的機能へと向けられ、生産過程に關しては彼らに織物

を販賣したり、或いは委託前貸人として生産者支配を代行する農村小資本家に對する依存を次第に強める傾向があつた。⁽¹⁾このように、都市の商人が農村の小資本を壓服しないで、寧ろ兩者が共生的關係に立つ事實は古くからランカシャー綿業を貫く重要な特質として銘記されねばならないが、ともかく生産過程に關する限り、綿業の急展開に比例して農村小前貸資本の機能に委ねられた領域は擴大されるのであり、後者の中から初期の工場資本家を豊富に見出しうる一因もかかる事情に基いている。なお右のような merchant manufacturer の商人化傾向とともに、こゝで附言しておくべきことは彼らの金融的機能である。すなわち、前貸支配や原料・織物の賣買に隨伴する各種の信用授受が農村工業の展開を掩護していたことは既に述べたのであるが、大商人の中にはロンドンとの取引に要する商業手形の授受を媒介し、或いは預金業務さえ行つて、地方銀行の役割を果していることも決して稀ではなかつた。例えば先にも引例したマーズダンの場合においても、彼のロンドン支店はマンチェスターから送付される織物の賣却と現金及び爲替手形の授受をなすのみならず、彼はまた多額の準備金を擁して他の商人にロンドン宛手形の割引をなし、或いは現金を受領するが利子付の信用を與えてロンドン宛支拂に必要な爲替手形の振出を行つてゐる。このような商業手形の取引、殊に手形割引の高度な發達がランカシャー工業の圓滑なる發展に重要な貢獻を果していたことは言うまでもないが、他方權威ある merchant manufacturer の振出す少額手形は地域的な支拂手段として一般に流通していたし、彼らの中には零細資金を利子付で預け入れ、これを自己の營業資金に充當したり、或いはリヴァプールの輸出貿易に投資する例すら認められる。⁽¹⁵⁾

以上の事實は決して merchant manufacturer の生産支配が全面的に後退し、彼らの前貸支配網が萎縮してきたとか、または問屋制支配体系が變質してきたということを意味しない。確かに彼らの資本は新しい投資面を見出して、漸次商業的・金融的機能にもより多く充用されてゆくのみならず、彼らの中から純然たる商人へ轉化した例も認められる。

然し merchant manufacturer と稱すべき類型の資本家と、その前貸網はデニ紡績機の發明されて後も依然急速に増大してゆくし、彼らが農村各地に putter-out を募集したり、農村織布工が彼らの putter-out たらんと求むる旨の廣告もまた頻繁であつた。⁽¹⁶⁾ かくしてマンチェスター商人の前貸支配圏は周圍二十哩に及んだと言われ、checkmaker は郊外の村落からオウルダム・アシントン地區に、fustian manufacturer はその外側をマンチェスター北方から遠くポルトン、ブラックバーンに至るまでの廣汎な農村工業地帯に網の目をのばしていた。次の第四表⁽¹⁷⁾は一七七二、七三、八一年のマンチェスター商工録から得た商工業者數を主要な關係部門につき簡潔に表示したものであるが、ウオヅワースによれば一七七三年の登録人員五二四名（その年の人口約三萬）、一七八一年の六八九名中約半數は「マニユファクチュアラ―」、四分の一は仕上業者、五分の一は純商人であつて、但し商人には單なる小賣業者も相當數含まれてゐるといふ。七十年代の初頭にはデニ紡績機が既にある程度まで普及しはじめていたとは言え、この機械は必ずしも舊來の domestic system をくつがえすが如き性格の變革を與えず、またアークライトの紡績機も未だ試験的な段階にあつた。従つて一七七二・三年の數字はわれわれの當面する時期の理解に役立ちうるし、僅か八・九年後の一七八一年と比較すれば著しい發展の一端も窺われよう。ところで、この表からも或程度の示唆が得られる如く、十八世紀後半には中葉までのチェック織に代つてファステイアン織が進出し、キャラコ捺染業も急速に發達する趨勢を示した。また多數の仕上業者が存在するという事實は先に述べた merchant manufacturer の仕上工程自營の傾向と併せて、この工程のマンチェスターへ決定的に集中されつゝあつたことを意味するが、それに伴なつて織物市場が益々マンチェスターに集約されてきたことを暗示している。このように市場構造の面でマンチェスターが排他的な重要性を帯びてくる事情を反映して、純商業的機能に終始する新たな商人層の生誕が認められ、棉花・綿糸・麻糸などに關する專業の原料商人乃至仲買商人の出現、merchant manufacturer の機能に包括されていた生産的職能と配給的職能の分化傾向、

第 4 表 Analysis of the early Manchester Directories

	1772	1773	1781
Fustian :			
Manufacturer	75	81	143
Cutter	23	16	34
Calenderer	14	7	7
Dyer	9	16	11
Dresser	2	1	8
Shearer	3	5	5
Check :			
Manufacturer	57	60	51
Calenderer	7	10	8
Smallware :			
Manufacturer	45	39	36
Calenderer	3	4	3
Threadmaker and Tapemaker	4	4	4
Silk :			
Manufacturer	17	18	20
Trowster	?	2	3
Woollen Manufacturer	12	9	10
Cotton, etc.			
Cotton Manufacturer and Printer	?	2	1
Calico Manufacturer and Printer	?	1	7
Manufacturer, Printer and Dyer	?	0	6
Cotton Printer	?	3	1
Calico Printer	?	1	11
Printer and Dyer	?	2	2
Velvet Dresser	4	3	2
Yarn, Cotton and Cotton Weft Merchant	26	31	36
Merchant and Warehouseman	?	30	46
Dealer by Commission and Travelling Chapman, etc.	?	9	22
Reedmaker	9	9	10
Shuttlemaker	?	2	2
Loommaker, etc.	8	2	3

第 5 表 Country Tradesmen with Warehouses in Manchester

	1772	1773	1781
Fustian Manufacturer	77	106	176
Check Manufacturer	26	24	28
Calico Manufacturer and Printer	?	1	18
Dealer in Raw Material	8	4	0
Woollen Manufacturer	4 ^(?)	23	84
Whitster	78	79	87

ランカシャー綿業の産業構造 (三)

琴野

織物輸出商や warehouseman の擡頭が無視されない。同時にまた地方週市の衰退も明瞭で、往年の市日にはマンチェスターやロンドンの商人で賑わつたボルトンから、今や逆に「マニユファクチュアラー」が毎週織物を携えてマンチェスターに出向いた⁽¹⁸⁾、次の第五表に示す如く、多數の農村閭屋制資本家が市内に倉庫を設け、こゝを據點として原料の仕入れ、織物の販賣を行うに至っている。ついにながら市場構造について若干補足すれば、ロンドンを通じての販路が織物配給機構の大筋であることには依然變化がないが、棉花輸入は勿論のこと、織物輸出に關してもリヴァプール商人の地歩は次第に向上しつゝあつた。國內の地方市場についても交通機關の整備されてゆくに伴ない駄馬の群を率いた Manchestermen の姿は消えて、見本のみを携行するマンチェスター商人の rider-out が活躍する⁽²⁰⁾という如く、内外の商業組織も急速に体裁を整えてくるのであつた。

さて、然らば country manufacturer の営みには如何なる變化があらわれてきたであらうか。こゝでも基本點では大幅な變化が認められない。たゞ先にも若干指摘した如く、形式的にはマンチェスター商人を頂點とする前貸支配体系の擴大とそれに伴なう「流通過程よりの(外面的な)生産支配」が伸展していつたに拘らず、彼らが産業革命に近づけば近づくほど商人へと復原する傾きを示したことは、country manufacturer のより直接的な生産過程支配に益々實質的な重みを加えさせつゝあつたことを注意せねばならない。更に染色・捺染・艶出の仕上工

程が地域化し、彼らの織物の大部分がマンチエスターの染色工によつて染められ、そこから艶出工に送られるようになる。country manufacturer のマンチエスター進出も積極的に行われる。すなわち艶出工の作業場は滑り戸付のプレスを設備した多數の小部屋に分割されているが、彼らの大部分はこゝに warehouse をもち、かつ仕上つた織物の處分は艶出工に指示を與えて販賣するのであつた。⁽²¹⁾ 先の第五表はかゝる倉庫をもつてゐる農村資本家の數を表示したのであるが、その地域的分布を一七七三年の country fustian manufacturer 一〇六人について言えば、ボルトン地區六五人、オウルダム、アシュトン地區一九人、ベリ、ヘイウッド、ミッドウルタン地區一名、マンチエスター西郊四名となつてゐる。尤もこのように進出した者は相當大規模な經營を行う country manufacturer であり、農村には更に小規模な前貸支配を營む織元の數も夥しかつたと想像される。併も彼らに對するマンチエスター商人の支配が擴展されつゝあつたとは言え、決してこの前貸体系に拘束されない獨立の經營が消滅した譯でもなかつた。例えば、ウォヅワースが詳細な資料を紹介してゐるボルトンの middleman ヘンリ・エスクリックの營みをみよ。⁽²²⁾ 彼がどの程度まで繩張り内の生産者に前貸支配を行う country manufacturer であつたかは明らかでないが、然し彼の相當大規模に營む原棉、綿糸、麻糸及びファステイアン織の取引においては大商人に對する隸屬關係も、小生産者に對する支配關係をも含まない對等の賣買が未だに活潑であることを示している。彼は棉花や麻糸をリヴァプールで大量に仕入れ、これをボルトン地區の原料商人や fustian maker (前貸資本家) に賣却するが、その場合においても賣手の買手に對する對等の取引であるし、また綿糸やファステイアン織を買付けてこれを直接ロンドンやミッドランドに賣るが、同一人物との間に原料の販賣と織物の購入が行われる場合においても必ずしも前貸支配の關係が認められない。それどころか、ある取引において彼へ織物を賣つた賣手が別の場合には彼の織物の買手として立現われることも稀でないという。その上かゝる自由な取引が大口の相手に對してなされるばかりでなく、多數の織布工や小織元との少額

の取引においても同様に行われているのであるから、このような商人の活躍が認められる限り小生産者の獨立經營は未だその基礎を失つていなかつたとも言えよう。⁽³³⁾ 勿論、變革速度の激しいこの時期においては、一七四〇年前後のこの例が同じ程度で二・三十年後にまで妥當するとは考えられないかも知れない。それにしても農村小生産者は根強い經濟的基盤に立ち、その分解がそれ程急激でなかつたことは無視され得ないであらう。

ところで、country manufacturer の營みについて更に注意を要するのは、彼らが問屋制商人として小織元や最下層の紡績工・織布工に對する直接的な前貸支配を行つていたということだけでなく、實は彼ら自身が“manufacturer”, “fustian maker” といふ呼稱のほかに“yeoman”, “webster”, “husbandman”, “leaseholder” と稱する如く、明らかに農村の生産者から經上つたものであり、併も未だ完全に織布工としての生産的機能を拂拭してないで農村工業の母胎にしかと密着していたという點である。尤も彼らの經營は致富するに伴なつて商業的職能に重心を移し、中にはマンチェスターに進出して商人となる者も尠くない。然しその下層は緩やかなカーヴを描いて直接生産者の上層たる小織元や親方織布工に連り、兩者の區別も資本蓄積の多寡や經營規模の優劣に求められないで、たゞ彼らの經營においては前貸業務の占める比率が優越しているという差異しか認められないところにまで達している。これを別の面からみてゆけば、十八世紀を通じて織布工、紡績工などの工業人口は急増するが、同時に問屋制支配の擴展につれてこれら生産者層の兩極分解もまた漸進した。かゝる分解の裡から上昇した織布工の中には、チャップマンが「織布工」が四―六臺の織機をもち、一―二人の徒弟、一、二乃至三人の日傭職人ジョーニイメンの助けによつて運轉しているのは通例で、遙かに大きな經營も尠くなかつた⁽³⁴⁾ という如く、明らかにマニファクチュア經營へと志向してゆく形勢が認められる。勿論かゝる産業資本形成への息吹は古く十六世紀より綿々と脈搏つていたのであつて、これが前世紀末より益々力強く繰擴げられるに至つたのである。また、逆にこのようなマニファチュアの發展の結果が獨立織布工層の分解

第6表 Number of Looms Owned by
Small Master Weavers

No. of Looms Owned	Dutch Loom Weavers	Linen and Check Weavers	No. of Weavers
1	7	14	21
2	10	13	23
3	8	13	21
4	7	9	16
5	3	3	6
6	5	1	6
7	4	—	4
8	—	—	—
9	2	—	2
10	1	—	1
11	—	—	—
12	1	—	1
13	—	—	—
14	1	—	1
Totals	49	53	102

利な條件が存した。さればかゝる端初的産業資本の生産力的展開は寧ろ前貸經營において伸展するという必然性をすら有し、自宅においては家族や住込の徒弟・職人と共に三・四臺の織機を運轉し、それ以外に三十人以上の織布工を各自の自宅で働かせる親方織布工の例も珍らしくないし、更には五・六十臺の織機を前貸支配下におさめたり、gentlemanと稱するまでに致富したことも稀でない²⁶。その上織布工に對する前貸支配は次第に賃機さえも伴なうに至るが、發展の一般的傾向は資本規模の大きくなるにつれて漸次彼らを職場經營よりも前貸經營や原料・織物取引に主力を注ぐ商人(country manufacturer, chapman, middleman)へと接近せしめる。また、かような織布工の前貸支配は殊に紡績工に對して廣汎に行われた。とりわけ飛杼普及以後に激化した紡糸不足期には merchant manufacturer や country

と没落を推進して問屋制支配の地盤を擴大していたのもあつた。ファスティアン織布工に關するものではないが、参考までに一七五〇年前後のマンチエスター教區における織機所有規模を第六表²⁶に示しておこう。然し乍ら、マニユファクチュアのもつ技術的基礎からすれば經營規模の擴大は一定の狹隘な限界にぶつからざるを得ない。それ故手織機の集中がある限度に達すると外業部としての前貸經營に進出するのであつて、そこには農民家族の副業を低賃銀で雇傭しうるといふ頗る有

manufacturer の紡績工に對する直接的支配が大規模になされたのみならず、織布工も自己の用いる織糸を確保するために必要な紡績工を從屬せしめておかねばならなかつたし、充分な織糸を獲得し得ない織布工にとつては問屋制資本家への依存が漸増するものも止むを得なかつたと思われる。⁽²⁹⁾ その上織機の構造も複雑となり、高價になつてゆくから、織布工層分解の契機は到るところに伏在していた。それ故都市工業的な性格を帯び、高價な織機と熟練労働者を必要とした smallware 部門では、先づ一七四七年より織布工の組合が生誕したし、マンチェスター近郊に集中している check 部門でも引續き一七五八年より同様の組織が結成され、いずれも五十年代後半の食糧騰貴をきっかけとして賃銀及び雇傭問題などを解決するため長期の熾烈な争議に入つてゐる。⁽³⁰⁾ より廣汎な農村に擴散し、純然たる農村工業的性格を保つていたファステイアン部門においては結社が困難であるためこのような例は認められない。然し、農牧兼營が多かれ少かれ殘存して、專業織布工の創出が未だ全面的に現れていない⁽³¹⁾ という點を別とすれば、事實上の賃労働者の一般的形成においてこれら二部門と大差なかつたであらう。

ともあれ、ランカシャー綿業の構造は産業革命の先驅期に立入ると著しく資本制生産組織への体容を整えてくる。

かつては産業構造の原基形態を形成していた獨立小生産者の紡織經營も今やその殆んどが何らかの形で前貸關係にまき込まれ、農村工業に對する問屋制支配という枠内で高度な資本家的發展を遂げた。尤も、問屋制度を媒介とする組織は嚴密な意味における資本制生産と言ひ得ないかも知れない。然し少くともこゝにおいては、資本主義への途が經營形態上でマニユファクチュア様式の展開という形のまゝで推轉されず、寧ろ前貸問屋制を媒介にしてゆく必然性が存在した。併もこの問屋制支配の發展を通じて資本蓄積が進行し、デ・ファクトの賃労働者が創出され、資本制關係の成立基盤が擴げられて行つたのであつた。

御多聞に洩れず South Sea Bubble の時代にランカシャーでも企業熱があふれたが、これは既に潜在的に進んでい

た蓄積資本が奔出したに過ぎない。⁽⁸²⁾ 前貸支配体系の頂點に立つ merchant manufacturer の資本規模は前世紀に比して遙かに巨大となつていた。從來資本の充用を原料・織物の賣買と前貸支配の狭い領域に局限され、せいぜい土地や運河建設への投資に活路を見出していた彼らにとつて、リヴァプールの急速な繁榮は外國貿易への展望を與え、純商業的機能に終始するに足るだけの活動領域を開いた。新しい發明や捺染をはじめとする仕上工程の發達は彼らにこれから工程への投資を促し、産業資本家へと前進してゆくことも可能ならしめた。リヴァプール港の海外貿易にもひとしく大商業資本の活躍が目覺しく、小資本の貿易投資が終熄した譯ではなかつたが、今や内陸の零細資本に許された資本充用の餘地は次第に狭められた。然し外國貿易によつて蓄積された資本は後背地の工業に流入し、ランカシャー綿業の展開に尠からず貢獻したのであつて、ウォヅワースはこれをいみじくも「港市と工業中心地との商工業資本の異花受精」と比喩している。かくて商業により蓄積された資本の生産への投下は綿業の着實な發展に衝擊を重ね、資本家的大企業の成立に基盤を與え、産業革命展開の前提條件を整えていつたのであつた。⁽⁸³⁾

然らば、この産業革命の展開に主導的役割を果した資本家層も、かゝる資本を蓄積した商人の中から出現したのであらうか。この問題はわが國においても既に或程度まで論じ盡されているのでこゝでは詳述しない。然し、かの變革期に大商人層は概ね自らが工場企業の危險に直接介入することを避け、寧ろ安泰に經營を伸展する餘地の擴大した商業、金融面に主力を注ぐ傾向が強く、結果的には言はゞ間接的に工場制度の發足を掩護する程度にとゞまつている。⁽⁸⁴⁾ 由來ランカシャー綿業は舊式産業規制の拘束から解放されて、自由な、かつ自律的な雰囲気を醸成していたので、資本家への上昇的交流が激しく、マンチェスターの大商人層もその殆んどが例外なく農村の布衣より身を起てたのであつたが、既に十八世紀中葉から merchant manufacturer の機能が生産過程支配より後退する傾きを示すとともに、農村を地盤とする中流資本家層の擡頭が従前に比し質的にも量的にも極めて顯著であつた。かゝる農村の small yeoman capi-

talists が或いはマンチェスター商人の putting-out agent として、或いは fustian master として生産者の直接的支配に携わつていた譯であるが、大問屋制商人が右の如き事情にあるとき、生産過程の動向になまの關心を懷いているこのような人々の間から工場企業の推進に運を賭する人物の現われるのは蓋し當然であらう。併もこの激變期には織布工の農村資本家へと榮達する途も極めて大幅に開かれたのであつて、紡績機出現後は織糸の相對的過剩のため、たとえ一時的にせよ織布工の繁榮が實現したから、ラドクリフの「勤勉にして注意深き青年でさえあれば當時の織布工の収入から manufacturer として身を立てるに充分な程度の資本は準備できたであらう」という言葉も滿更誇張とは言えない。されば才能と精氣に恵まれる限り織布工が putter-out になり、更に農村の中流資本家となり、やがて工場建設の融資にさえ成功すれば短年月の間に工場資本家となることも困難ではなかつた。終りに、初期の工場資本家が農村織布工や小ヨーマン資本家から出自していることは單なる工場主層の系譜調べの興味からでなく、ランカシャー綿業における産業構造の核心を表象するものとして極めて重要な意義を帯びてゐることを附言しておこう。

註(1) Wadsworth & Mann, op. cit., p. 140. による。

- (2) この時期における綿糸混織の織物はファステイアン、cotton-linen (その主たる品種はチェック) 及び smallware に大別される。前二者はいずれも麻糸との交織であるが、後者は麻糸と梳毛糸が主に用いられ、綿糸の混入は次第に減じつゝあつた。従つてここでは一應ファステイアンと cotton-linen が考察の對象となるわけで、嚴密に言えばこの中でも cotton-linen は麻糸が主になるから寧ろ麻織物の一種と見做される。然し兩者の兼營や、また市況に應じて一方から他への切換えが頻繁であつたのみならず、凡ゆる面で兩者は密接な關連をもつてゐる。それ故これらを區別してファステイアンのみを取扱ふことは却つてランカシャー綿業の實情にそぐわなう。

(3) 9 Geo. II, c. 4.

(4) 以上に關つては Wadsworth & Mann, op. cit., Chap. VI-IX. 及び Daniels, op. cit., pp. 16-24. を參照。

(5) Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 98-106, 284-8, 329-333.

なお、オランダ織機の價格は大凡六―十二磅であり、これは普通の織布工の數十週分の勞賃に相當したと考えられる。大規模經

營は別として undertaker (その性格はファステイアン部門における「農村の中間的職元層」に對應する) の織機集中程度は二十臺に及んでいることも稀でないが、通常五十臺のマニファクチュアを形成していた。

(6) Chapman, op. cit., p. 15.

(7) Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 419 f., 444.

(8) Ibid., pp. 450 f.

(9) Ibid., pp. 273-6; Daniels, op. cit., p. 38; Moffit, op. cit., p. 197.

merchant manufacturer の紡織工程支配はこれを契機として著しく伸展したものである。例えば、一七五五—一七五六年の例によれば、あるマンチェスター商人はプレスカト(リヴァプールとウオリントンの間)の近在で綿糸紡織の委託前貸をなす三人の partnership に毎週三十一磅餘を手形で送り、これによつて購入した棉花を紡がしめ、毎週一捆(二十九磅)の綿糸を納めさせていた。このように、近郊の直屬紡織工を雇傭するほかに、かかる遠隔地に對しても紡糸の委託前貸人を通してマンチェスター商人の手は伸びていたのであつた。

(10) Daniels, op. cit., pp. 72 f.; Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 174-183.

(11) 以下のタチトに關しては、Ibid., pp. 149, 153, 155 f., 229, 233, 243-8, 444 f.

(12) Radcliffe, op. cit., p. 131.

(13) Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 252, 254, 282, 306 f.

(14) Ibid., p. 251.

(15) Ibid., pp. 91-6, 248-250.

(16) Chapman, op. cit., p. 16; Daniels, op. cit., pp. 143-4; P. Gaskell, The Manufacturing Population of England, 1833. p. 17.

(17) Daniels, op. cit., pp. 67-8. 及び Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 255-9. の諸表より作製。

(18) Wadsworth & Mann, op. cit., p. 252.

(19) Daniels, op. cit., pp. 69-70. 及び Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 259-60. より作製。第四表と同じく、前者からは一七七二年の、後者からは一七七三年及び一七八一年の數字を收録した。

- (20) Wadsworth & Mann, op. cit., p. 236 f.; Daniels, op. cit., pp. 62-3.
 - (21) Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 253-4.
 - (22) Ibid., pp. 261-273.
 - (23) 通常彼は棉花は六箇月の信用供與を得て買ひ、織物は三箇月の信用期間を與えて賣つてゐる。ファスティアン織の購入は現金で支拂われるが、一部を棉花や麻糸で、或いは短期の手形で支拂ふこともあつた。時には取引の決済を原料との交換によつてのみならず、乳牛の提供によつてなされることもあつたといふ。
 - (24) Chapman, op. cit., p. 23.
 - (25) Wadsworth & Mann, op. cit., p. 327. 作り作製。
 - (26) Ibid., pp. 326-8.
 - (27) Ibid., 338; p. Daniels, op. cit., p. 74; Chapman, op. cit., pp. 22-3. 尤も、賃機は他の繊維工業に比すればそれ程普遍的ではなかつた。
 - (28) その農村に與えた影響の vivid な描寫はメラに關するラドクリフの記述をみよ。(Radcliffe, op. cit., pp. 59-60.)
 - (29) ゲストは當時の織布工の窮狀を、午前中に三、四哩の道程を歩き廻つて、五、六人の織布工を督促し、そして漸く午後の仕事に必要な織糸を蒐め得たが、ぐずい紡績工を驅りたてるためにリボンやガウンを贈つた、と説明している。また、オグデンも織機の運轉を休止しないためには間屋から受ける紡糸賃以上のものを紡績工に支拂わざるを得なかつたと述べてゐる。(Wadsworth & Mann, op. cit., p. 276.)
 - (30) Wadsworth & Mann, op. cit., Chap. XVIII, XIX; Daniels, op. cit., pp. 40-55.
 - (31) なお先述した一七五八年のチェック織布工の "Apology" には賃銀水準低下の要因として、既に述べた farmer-weaver の競争のほか、教區徒弟の雇傭を指摘している。また彼らの運動は工資引上げや織物規格の一定を要求するとともに、親方の雇傭人員制限及び徒弟制度の遵守を主張し、そのためにエリザベスの徒弟條例を援用せんとしてゐる。
 - (32) Gaskell, op. cit., p. 36 f. を參照されたい。
- なお、ギヤスケルは産業革命によつて影響を蒙つた農村の階層をヨーマン層、小土地保有の上層職人及び下層の工業専従者に區別して論じてゐるが、これは本稿の主題からそれるので別の機會に譲る。

- 32 Wadsworth & Mann, op. cit., p. 214 f.
 33 Ibid., p. 212.
 34 Dobb, op. cit., pp. 277-81.
 35 Mantoux, op. cit., p. 376 f.
 36 Radcliffe, op. cit., p. 25.
 彼自身の生涯はまさに織布工→農村の前貸資本家→工場主への經歷を辿つた典型であつた。
 37 尤も、マンチエスター商人の中から工場資本家が出なかつたというのではない。サミュエル・オウルドノウの場合はその好例である。(G. Unwin, Samuel Oldknow and the Arkwrights, 1924, esp. p. 123 f.)

六、結 語

さて、ひとまず以上によつてランカシャー綿業の産業構造につきその起點から資本制生産成立に至るまでの概觀を試みたのであるが、われわれはこれを通觀してまことに順調なる資本主義への歩みを看取しうる。かゝる着實な發展が如何なる社會經濟的條件の下に推進されたかという點に關してはもはやこゝで繰返す必要もなからうが、マンはこれを同じく農村工業の形態をとつていたフランス綿業と對比し若干の要點を指摘している⁽¹⁾ので、いまそれを補足しながら要約してみよう。

先ず資本制生産様式の發展という點からみれば、フランスには殊にモスリン、ベルベットなどの新興奢侈品部門で所謂“grande industrie”が成立し、高度に發達した形態のマニユファクチュア經營が認められる。然しそれらは絶對王政の産業保護政策に基いて存立しているに過ぎず、寧ろ特權的保護を除外されている殘餘の部面での發展は取殘されているから、巨大な特權企業⁽²⁾の存在は決して資本制生産の全構造的な展開を表示しない。またノルマンディの農村

工業でも都市商人と農村織布工の中間に前貸代理人や獨立的な農村織元層が介在するが、都市商人と農村織元乃至織布工の間にランカシャーの如き共生的關係は認められず、産業規制を楯にとる都市商人(或いはその代辯者たる前貸代理人)の壓力は農村小資本や生産者層の成長を抑止する方向に動いていた。これは“great mere village”と稱された非特權都市マンチェスターの大商人層が不斷に small yeoman capitalist の身分的上昇により新陳代謝され、それに伴つて産業構造自体も固定化しなかつた事情と比較されたい。要するにフランス綿業の産業構造においては、農村近代化の立遅れや國家の産業政策にわざわいされて自律性や弾力性の缺如したことが資本制生産の自生的展開を阻んでいたであつた。次に産業規制の拘束力や特權組合の統制力の面でも兩者は著しい差異を呈した。ランカシャー綿業が頭初から大幅に解放されていた産業規制をビュリタン革命以後は實質的に排除してしまつたことに比べれば、十八世紀のフランス綿業は絶對王政の重ぐるしい重商主義政策下に重壓され、せいぜい保護を受けた特權的企業において跛行的な産業發展を遂げたに過ぎない。併もその政策の緩和はフランス革命に至るまで一進一退の狀態にあつた。尤もイギリス綿業が國家の政策から全く無關係に放任されていたのではない。然し十八世紀のイギリス政府は生産面で姑息な保護を加えることによつて産業の發展を促すような政策はとらず、寧ろ流通面から消費税の撤廢、輸出奨励金の交付、競争商品の輸入禁止などを行い、また技術の國外流出を防ぐ考慮から熟練労働者の外國移住や新發明機械の輸出を禁遏することによつて工業の振興をはかつたのであつた。されば産業の自由を享受したランカシャー綿業の産業構造が農村中流資本の潑刺たる活躍によつて常に活力に富んでいたのに反して、フランス綿業においては産業規制に依據する都市商人の對立に壓せられ、農村小資本は成育の萌芽を摘みとられ、産業構造も同時に膠着してしまつた。かくして世界市場の擴大に順應しうる彈力と活力は失われた。最後に、政治的、社會的條件においても同様の相違が認められる。植民地戰爭が英國に有利な展開を遂げていたのは確かにランカシャー綿業の前途にとつて全く

幸運であつた。然しフランスが *ancient régime* の泥沼に呻吟していたとき、イギリスが近代國家を成立せしめていたのは僥倖によつて獲得された成果ではない。國內市場の形成が立遅れ、重税が資本蓄積を妨げ、高利と煩瑣な産業規制が生産者を悩ましていたフランスに比較すれば、十八世紀のイギリスは遙かに恵まれていた。フランスに亡命した飛杼の發明者ケイは兩國を對比して、イギリスの勞賃は二倍であり、生活用品は三分の一廉いと述べている。假に誇張があつたとしても、イギリスでは資本制生産展開の基盤が遙かに大幅に築きあげられていたことは明らかである。

ところで、このように自成的な展開を遂げたランカシャー綿業においては、農村工業を苗床とする小規模マニユファクチュアが不斷に簇生したのであるが、併もかゝる端初的産業資本の發展は原形のまゝで伸展されず、所謂アンウインの「外的上昇的移入」、或いはヒイトンの「生産者の商業への上昇的推進」という形をとつて、前貸問屋制を媒介に促進されたのであつた。同時に、農村工業のこの坦々たる展開は商人によつて供與された資本及び信用が前提とされて全面的に推轉し得たのであるが、それは同じくアンウインの「内的下降的移入」、或いはヒイトンの「商人の生産への下降的推進」として、商人の問屋制支配に導くものであつた。問屋制度を媒介とする二つの領域のかゝる交流が資本制生産成立過程において占める歴史的意義は甚だ積極的な重要性を帯びているものと考えられるが、この點に關する論述は更に研鑽を重ねて後日を期したい。

註(1) Wadsworth & Mann, op. cit., pp. 202-8.

(2) この點に特に注意を喚起しておくのはイギリスにおける金融機構の早期な發達と十八世紀における利子率低下の重要性である。例えば、アシュトン⁽¹⁾は「經濟的發展の歩調がなせ十八世紀中葉に速くなつたかの理由をただ一つ求める——そういうことは誤りであるが——とすれば、われわれが注目しなければならないのは利子率の低下である。」(T. S. Ashton, *The Industrial Revolution, 1760-1830, 1948, p. 11.*)と述べてゐる。尤も、低利であつたこと自体は、資本蓄積の進行と金融制度の發達によつて實現し得たのである。